

団体名	安芸太田町	所属	地域づくり課	他団体等との連携	川・森・文化・交流センター
連絡先	(0826) 28 - 2112				

取組事例名	地域住民等との協働によるマラソンイベントの開催	取組期間	平成22年9月～
--------------	-------------------------	-------------	----------

取組の概要 ～ 地域住民との協働によるウルトラマラソン『安芸太田しわいマラソン』の開催

安芸太田町の地域の活性化を目的として、平成22年より安芸太田町全域をコースとしたウルトラマラソン『安芸太田しわいマラソン』（主催：安芸太田しわいマラソン実行委員会）を開催している。
当大会は、運営に町内自治振興会、企業、団体、加計高校生等地域住民がボランティアで協力するなど、全町を挙げてのイベントとして定着している。

取組の背景 ～ 町のPR・地域活性化を目的としたウルトラマラソン大会開催の提案を受ける

広島県安芸太田町は、中国地方ワーストの人口減少率、広島県最少人口、そして高齢化率県内1位と、過疎化かつ高齢化が課題となっている。
このような状況の中、町有施設指定管理者事務局長の発案により、全国に向けての安芸太田町のPRや地域の活性化、合併した旧3町村全体を巻き込んだ取組による一体感の醸成等をねらいとして、『安芸太田しわいマラソン』を開催することとした。

取組のねらい ～ 町内全域をコースとすることにより、町のPR・活性化・一体感の醸成を図る

- 1 観光名所も巡る町内全域をコースとすることにより、全国に向けた安芸太田町のPR及び各地域の活性化を図る。
- 2 全町を挙げてのイベントとし、旧3町村の交流による町内の一体感の醸成を図る。
- 3 ランナーが町民の温かさにふれることにより、安芸太田ファンを増やし、ランナーのリピーター化を図る。

取組の具体的内容 ～ 町民・行政が一体となり、「おもてなし」の気持ちを第一にマラソン大会を運営

- 1 「安芸太田しわいマラソン」の概要
町有施設指定管理者事務局長の「安芸太田町の豊かな自然を生かし、町全域をコースとする全行程88km、高低差854mという日本有数の過酷なコースとなるウルトラマラソンを開催し、町のPR及び活性化につなげる」という提案により、平成22年から「安芸太田しわいマラソン」を開催している。
- 2 運営体制
実行委員会には、体協等の町内の各種団体、町観光協会、太田川森林組合、自治振興会連絡協議会、町消防団、広島市農協、行政（国・町）等が参画している。
また、大会当日は、コース沿線の自治振興会、企業、加計高校生、県内数大学の学生ボランティア等によるエイドステーション（無料飲食物提供所）運営や、安芸太田町消防団による交通整理など、多くのボランティアが運営スタッフとして協力し、全町を挙げたイベントとなっている。（平成24年大会では、エイドステーションの運営が困難な地区に対し、県地域政策局の過疎地域振興課等からボランティア運営スタッフの協力を得たほか、平成25年大会では、広島市内の大手民間企業2社が新たに運営協力団体として参加し、今年の大会も参加する予定。）
- 3 見所・全国的評価
コース上に「温井ダム」、「深入山」、「恐羅漢山」、「三段峡」、「井仁の棚田」など、数多くのビューポイントを配していることに加え、「おもてなし」の気持ちを第一に選手に对应していることもあり、選手から「沿道から名前を呼んで声援してもらい感動した」などの声が寄せられている。
当大会は、平成23年、平成24年、平成25年と3年連続して「全国ランニング大会100撰」に選出されるという高い評価を受けており、特に昨年の大会は、フルマラソンを超える距離のウルトラマラソンの部門で、高知の四万十川ウルトラマラソンと並び、評価第1位に輝いた。本年（第5回大会）も、募集開始から1か月以内で全国から定員（582名）を上回る658名を超える応募があり、ウルトラマラソンを走破するランナー間では、定着したイベントとなっている。

取組を進めていく中での課題・問題点 ～ 過疎・高齢化が進行する中での運営スタッフの確保

過疎・高齢化が進む中、コース沿線の自治振興会にとっては、特に大勢の人数を要する「エイドステーション（無料飲食物提供所）」の運営スタッフや、交差点等の選手誘導員を確保することが困難になりつつあり、継続的な運営協力体制が維持しにくくなることが予想される。

今後、円滑に大会を運営するためには、町内外の企業・団体・学生等のボランティアによる運営スタッフの確保が課題となっている。

創意工夫した点 ～ 大会運営への行政の関与を最小にとどめ、民間の持つ運営力を最大限に生かす

1 コース沿線外の自治振興会の参画

町を挙げた大会とするためには、コース沿線の自治振興会だけでなく、沿線外の自治振興会の参加協力が不可欠であることから、第2回大会から、自治振興会連絡協議会に実行委員会に加わってもらった。これにより、同協議会を構成する旧三町村の支部長が実行委員として加わることとなり、沿線外の自治振興会が参加しやすい体制を確保した。

2 行政の後方支援

当大会は、民間有志が発案し運営主体となっていることから、町行政は、民間だけでは困難な大会運営部分、例えば、選手の安全確保を支える25台を超える大会運営車両と、その運転要員等としての職員派遣、運営資金の助成等最小限の関与にとどめ、民間の持つ運営力が最大限活かされるよう工夫している。

3 大会参加選手名簿の全戸配布

毎年、大会参加選手のゼッケン番号、氏名、性別、年代、都道府県名を記載した名簿を、事前に町内全世帯に配布しているが、こうした取組みは、小さな自治体だからこそ可能なことと思われる。これにより、各エイドステーションや沿道では、全国的にもあまり例がない、選手の個人名を呼んでの応援が定着している。

取組の成果（効果） ～ 選手と地域との交流が、地域に元気を与えたとともに選手もリピーター化

「おもてなし」の気持ちを第一に地域を上げて対応していることもあり、選手から「沿道から名前を呼んで声援してもらい感動した」などの声が寄せられている。その一方で、いわゆるリピーターと言われる、全国から毎年のように大会に参加する選手のガンバル姿は、高齢化や過疎化に悩む地域住民にとっても、「息子や娘がふるさとに帰って来てガンバっているように思える」という声があり、選手から逆に勇気もらった、元気をもらったという声も上がっている。

こうした選手と地域との交流が、地域に元気を与えてくれており、安芸太田町のファンを増やし、ランナーのリピーター化を図るという大会の目的は、大いに達成されていると思われる。

町内外の個人、団体、地域、企業、行政がまさにタッグを組んで運営しているこの「安芸太田しわいマラソン」は、町が進める「協働のまちづくり」の姿を具現化したものといえ、この大会の運営形態を地域に出向いた際に丁寧に説明すれば、「協働」という意味を理解しやすいという住民の声が増えつつあり、他の事業推進にも相乗効果が表れつつある。

今後の展開 ～ 地域の負担を考慮し、身の丈に合った大会運営をめざす

今年の第5回大会では、記念大会として100キロコース（100名限定）を設定したが、新たにコース沿線となる自治振興会では、「ようやくしわいマラソン大会に参加できる」との声を上げてもらい、円滑な地域の協力が今後も期待できる状況にある。

一方、参加選手を600名以上に増やすことは、エイドステーションを運営する地域に大きな負荷がかかる。地域に負担を今以上にかけないためにも、実行委員会内では「身の丈に合った大会運営」をめざすこととしている。

他団体へのアドバイス ～ 地域をまきこんだイベントにするためには、行政は後方支援に徹する

地域を元気にするためには、いかに地域を巻き込んだイベントにするかが大切と思われる。この大会が初めから行政主導で行われていたら成功はなかった。時には、民間の力を信じ切って、後方支援に徹することも大切である。